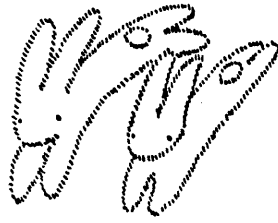


兔園隨筆

出會い（六）

—著作集への歩み—

蕪木寿江



生前、周郷先生がおっしゃっておられた著作集の装丁のお願いを、東山魁夷さんに手紙を書いて依頼した。お返事がすぐ来た。「見失いがちな人間のぬくもりの感じられるお人でした。丁度、六月初めは、唐招提寺に襖絵

を奉納するための忙しい最中ですので、中旬ごろに一度、お電話をしてみても戴きたく存じます」と記され、電話番号が書いてあった。私はその日を待って電話をした。若い元気な声で、道順を教えて下さった。どなたかわ

からないその声の方に「あのおー、世間人並の御礼はとてもおだしできないのですが：：：」と思わず震えながら言ってしまった。

「又、いらっしやうから伺ってごらん下さい」と言われた。この不躰な突然の言葉に驚かれた様子もなく、寧ろ、いたわられているような気がした。私はこの方の顔、姿を一瞬のうちに描いて、受話器を握ったまま何度も、「有難うございます。よろしくお伝え下さいませ」と頭を下げた。

かど創房の門馬正毅さんと、柏樹社の社長さんとお訪ねした。表札に、「東山」と書かれてあり、正木と珊瑚樹のような垣根が続き、樹々に囲まれた清楚な佇まいだった。恐る恐るインターホンを押すと、電話で聞いたことのあるあの明るい声がして、「どうぞ、お入り下さい」と言われた。しずしずと白壁に沿って格子の玄関を入った。小さな貼紙が

してあって、「制作中や、旅行のときは、お会いできないことがあります」と書かれてあった。

渋い青い色のスリッパを履き、青の世界を思わせるような落ちついた色の絨毯の応接間に通された。ガラス戸越しに見るお庭は、白樺なのか間隔をおいて控え目に立っている、という感じがした。モソモソしていると、お手伝いさんなのか、私の描いた人と同じ方が「あの電話の説明で、ここがわかりましたか？」と言われた。「ハイ、すぐわかりました。」と、救われたように口をきった。「先生はどこにお座りになるのですか？」と伺うと、「ここですから、お庭の見えるこちら側にどうぞお座り下さい」と、にこにこして言われた。何だかとても座ってお待ちする気になれずにいると、お茶（煎茶用の小振りのお茶碗）と干菓子、桜の花が一つ描かれてい

る懐紙にのって出された。テーブルの小さなガラスの瓶に可愛い三色すみれが数本と、もう一つの花瓶には淡い色のあじさいと、もも色のお花が押しあつた。

眼鏡をかけて日本的な奥様がお見えになり、やがて東山先生がいらっしゃつた。ベージュ色のシャツカラーの半袖と、少し薄めの同じ色のカーデイーガンを着ておられた。ご挨拶をして頭を上げると、私をじつと見てきれいな眼に会つた。切れ長の大きな眼と、大きな耳、色つやのよい皮膚、透るまろやかな声で、「周郷さんは急に亡くなられたんですね。惜しいことをしましたね。私と周郷さんとはお会いしたのは少ないのですが、この町の先に中村さんという家があつて、その長男の家庭教師を学生の周郷さんがして、私がその家（味噌問屋さん）の倉庫の二階で世話になつていた頃、交流があつたの

です。私が外国人の花売りのモデルを探しているのを聞いて、二十一年の二月でしたが、周郷さんが近所のロシア人を紹介して下さることになつたのですが、結局は駄目だったのですが……、その婦人が『今の日本には、日本人の心が無くなつてしまつてゐる』と言つていたというのを聞いて、すっかり心打たれました。」奥様とともども話された。周郷先生の写真を手に、懐かしそうにごらんになつていた。

お茶大を退官後の半農半学の生活^{*}などをお話すると、「口で言つてゐる学者は多いけれど、自らそれを実行してゐる人は少ないのではないでしょうか、私など、とても及びませぬ」と謙遜して話された。「先生のお勉強の部屋を瞑想の家と名づけ、その入口に、クレヨンで描いた世界地図の横に、『欲深い人は入ることができません』と書いてありまし

た。神の心をこの人間社会に生かして実行してゆこうと、自らに課した言葉だったので「と続けて話した。周郷先生が東山先生を

尊敬し、「僕は負けたよ」と言っておられたとつけ加えると、「周郷さんは偉い方だ、私の描いたものは祈りで、懺悔なのです」とキラキラ光る眼で話された。この東山魁夷の眼を、この生き方を、この生命を、周郷先生が愛して、ティヤールド・シャルダンの英訳『The Heart of Matter』には『アイシュタイン』シャルダン『私（周郷博）』東山魁夷『セザンヌ』と、自らの位置を定められようとした書き込みがあった。

紅茶とカステラが運ばれてきたが、自分がどこにいるのか時々わからなくなり、――雲の上に居るような気持もして――お話を聞くことと、最近の周郷先生を伝えたいと思うばかりで、手もつけられず、唯、渋沢の奥様が

お土産にと大磯のはんぺんを包んで下さった先生の風呂敷を、テーブルの下で握りしめていた。

大きさと紙質とか、専門的な話になった。先生が希望していらっしやった神谷美恵子のエッセイ集（ルノール社）をお見せした。門馬さんの作った先生の詩集、「失なわれた季節を求めて」（国土社）の装丁を大変気に入って誉めていらっした。八月一日から一ヶ月間、ヨーロッパにいらっしやるので、新しく描く時間がないので、その前にして下さることになり、二十五年に描かれた「道」が選集の内容にふさわしいとおっしゃられ、一同賛成した。東山先生は一つずつ奥様に相談され、多くの画集をお持ちになり、内容を検討されておられた。奥様も立派な方で、日本画の川崎小虎の長女である、「旅の環」（新潮社）で読んだことを思いだした。

「超、忙しいのですが、七月に下書を作りましょう」と言っておきながら、暖かさの感じられる雰囲気、握り締めていた風呂敷をお見せし、「この風呂敷は一月十四日に、沢山の本を、（主に原書ですが）お話ししようとして包んでいらした風呂敷です」と話すと、「あーこれですね、機関誌『いちがお』に書いてありましたね」と、奥様がしみじみ話された。ここでは見せまい、と思っていた涙が、ふうっと流れてきた。一時間二十分、始終静かな穏やかな言葉に包まれ、いつもの私にいつしか戻ってしまった。帰りには、ご夫妻でお玄関に正座して見送って下さり、その偉さに身が締る思いであった。

門を出てバスを待っていると、涙が堰を切ったように流れてきた。下を向いている門馬さんの肩も揺れていた。大役を果たした安堵というものでもなく、唯、「ありがたい」と

いう思いと、「勿体ない」という思いと、そしてその底にいつもある周郷先生が……先生が生きていらっしやったら……と思う思いに耐えられなくなった。先生は、東山魁夷が大切で、大切で、お会いできなかった。自分の為に時間を、労力を費やさせることができなかったのだ。それ程大事で、著作集の装丁もお願いできずに亡くなられた。

次の日も、次の日も東山魁夷の暖かい血が私の心の中を流れていた。その指先で子ども達に触れると、子どもの体の中に、魁夷の魂が宿るようでとても幸せだった。

この原稿を書いていると（三月七日、土曜日、二十一時少し過ぎ）三チャンネルで、東山魁夷と、中村歌右衛門の対談をやっていた。（「伝統の流れに新しい水を汲む」という題であったのは終ってから知った）私はペン

をおいて画面に見入った。

——『道』——

今、魁夷さんの家のことを原稿用紙に向けて書いていたのです

あの青い絨毯のこと——

お庭の白樺のことを——

それが同時にテレビの映像になって写っているのです

「著作集の装丁に……」と言って下さったあの『道』が、画面いっぱいひろがってきました

私はどうしたらいいのでしょうか

ここから逃げたくありません

先生がいつも話していた

「自然を大切にすることは

人間を大切にすること」だと

今、たった今、同じことを今、

魁夷が言ったのです

聞こえましたか——

これが「出会い」というものなのではないか

私は、「教育とは、人との出会いである」

と

まとめようとしていました

しかし、「出会い」とは

今夜のように、偶然に訪れて

又、心の中に

一途に燃える火を

点してくれるものなのではないか

* 幼児の教育 86 巻第 4 号 参照のこと

(市が尾幼稚園)